

# ■ 2026年度 入試問題分析シート ■

京都大学

前期日程

科目	地 学
----	-----

総 括

難易度(昨年比)	難化	昨年並	易化
分量(昨年比)	増加	昨年並	減少

**〈総 論〉**

一見すると例年とは異なるように感じる。問題ⅠとⅣは小問数は8、問題Ⅲは小問数が4しかない。しかし、難易度が変化したわけではない。落ちついて丁寧に解き進めればよい。長々と述べ立てずにすむ説明を求める設問が多いので、出題の焦点から外れずに、整理して論述することが大事である。

**〈特記事項・トピックス〉**

例年のように、1つの主題についてじっくりと掘り下げて考察する設問が少なかった。さまざまな現象の関連に着目して科学的理解を次々と答える形式であった。Ⅰの問4、Ⅱの問1(2)、Ⅲの問2と問4(2)、Ⅳの問5などは新傾向として作問されたと考えられる。

**〈合格への学習対策〉**

教科書の内容に対して、偏りのない十分な理解を伴わないと合格点に達しない。地学現象を理論的かつ統一的に説明できる必要があり、かつ、計算問題も多く出題されることから数量的な理解も欠かせない。暗記という意味ではなく、科学的な理解を意識して学習を続けていくこと。

## 設問ごとの分析

問題番号	出題形式	範囲	分野・テーマ	特徴(内容分析・解答上のポイント)	問題レベル
Ⅰ	穴埋め 計算	地学	恒星の等級と光度、 白色わい星の諸量	天文分野では計算問題の割合は高くなる。決して難しい計算ではないので、手際よく計算をすすめないといけない。問4では有効数字2桁の指示から、 $10^{0.16}$ の計算をどこまで精密に行うかを悩んだかもしれない。	標準
Ⅱ	選択 穴埋め 計算 論述	地学	地磁気、 太陽活動と太陽風、 太陽の自転周期 (会合周期)	問1(2)では地磁気の伏角の緯度分布のグラフ選択が出題された。問5の論述は解答欄の大きさからどこまで説明するかを判断すればよい。これら以外の設問は、基本的なことを問うものであり、計算問題も比較的容易なものである。	やや易
Ⅲ	穴埋め 計算 論述	地学	マグマの発生、 プルーム、 海山列の形成、 海嶺付近の地磁気異常	問1と問2は基本問題である。問3のマグマの発生と化学組成について、解答に要求されていることを見誤らないようにしたい。問4(1)の説明も同様である。プレートの相対的な移動速度は図形的に考えればよい。	標準
Ⅳ	穴埋め 選択 論述	地学	ケイ酸塩鉱物、 $\text{SiO}_4$ の結合と金属イオンの割合、 日本の地質構造、 気候変動と同位体比	問1,2はケイ酸塩鉱物の基本事項である。問3(2)をどのように説明できたかで得点差が生じるかもしれない。また、問4~6および問8は教科書内容と一般常識(日本の河川のおおまかな長さ)で正答できる。問7において、海水中の酸素の同位体比 $^{18}\text{O}/^{16}\text{O}$ の増減と気候変動の関連が正しく考察できたかどうか。	標準

「問題レベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、問題の難易度を5段階〔難・やや難・標準・やや易・易〕で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。